

八月二日

早いうちから目が覚めていた。船窓の外は相変わらず灰色だ。憂鬱な灰色の空と海。これが北海道への第一日目とは。

しかし、そんな灰色の中から北海道の陸地が姿を現した。緑の大地という北海道のイメージとは違って、初めて見る北海道は灰色コンクリートに覆われた苫小牧だった。赤錆びて見える工場地帯がそのコンクリートの上に林立している。はつきり言って汚い風景だ。せめてもの救いはこれから俺が向かう方向の空は明るいことだ。

苫小牧港が次第に細部まで見えて来る。もうすぐ上陸だ。予定より一〇分早い六時三十五分、さっぽろ丸は苫小牧フェリーターミナルに到着した。

到着の少し前から荷物をすべてまとめてFデッキに下りた。しかしここで大失敗をした。下りるデッキを間違えたため、もう一度あの階段を重い荷物を持って上がったのだ。死ぬかと思ったがもうヤケクソになった。

バイクと再会し下船の準備をする。Fデッキの中は暑い。汗だくなる。バイクを留めてあるベルトの外し方が解らなくて困っていたら、前にいるライダーが教えてくれた。ありがとっ。

船が埠頭に到着したようだ。バイクがいつせいにエンジンを始動する。轟音と排気ガスの煙がせまいデッキの中に充満する。

一台ずつ外へ出て行く。俺の前で走っていたXZ400のライダーがフロアから坂への急なターンに失敗して、坂道でこかした。俺はその横を駆け抜けた。セカンドギアのまま注意深く、小さな鉄の突起がたくさん出ているデッキの中を進み下船口を出た。

「ふりむけば地平線」という小説では、ここで頭の上にあっけらかんとした青空がひろがっていた。しかし現実の俺の上にひろがっているのは灰色の空だ。もっともゆっくり空を見る余裕などない。レースでスタートしたときのようにマシンが次々とフェリーターミナルのアスファルトの上を駆け抜けてゆく。俺は半ば夢中でその流れにのっていた。

さっぽろ丸の後方からは四輪が吐き出されてくる。俺はその四輪が通るターミナルビルの前にバイクを止め井出氏のソアラを待った。

ほどなくソアラが見えた。井出氏に合図してもう少し先へ行こうという意思を伝える。ターミナルビルの前を通り過ぎ、左へ曲がった少し先の路端に2台は止まった。

いちおう自分のペースで別々に走るとして、待ち合わせの場所を決めた。日高のあたりで国道がダートになったところ、ということにした。しかし、今から考えると北海道のことを何も分かっていなかった。

ソアラがスタートして間もなく、フェリーで同室だった二人のクルマがやって来て、別れの挨拶を交わした。

そして俺のバイクもスタートする。突き当たりの交差点を右折する。リードが走っていたのにびっくりした。むろん今のフェリーから降りて来たのだ。

遂に、本当に遂に、北海道の大地を走り始めたのだ、という興奮に震える。この空気の冷たさが、何よりそれを教えてくれる。

すでに道路の風景は北海道だ。勇払平野を走り始めている。走り始めてすぐにガソリンスタンドで給油。「北海道は寒いでしょう。どこから来たの？風邪ひかないようにね」などとスタンドのおやじが声をかけてくれる。

しばらくはR235をひた走る。しかし、ほんとに北海道はなんて所だ。この道、このクルマの少なさ、信号も皆無。そしてこの寒さ。しばらくして寒くて我慢できなくなったのでオーバーパンツを履き、皮ジャンの下にベストを着て、さらにタオルをマフラーの替わりに首に巻く。まるで冬だ。それでもコンペシールドの下から巻き込んで頬に当たる風は冷たい。正直なところ、風邪をひくんじやないかと不安だった。

北海道で交わすピースサインには実感がこもる。それを初めて感じたのもすぐだった。寒くて、しかも今にも雨が降りだしそうな空だ。そんな中を一人で走っている。向こうからライダーがやって来る。向こうも一人だ。そしてピース！涙が出そうになる。これが本当のピースサインだ。湘南や箱根でかわすピースサインとは重みが違う。

北海道ではじめて交わすピースサインは、何だか全身黄色ずくめに見えるオフロードライダーだった。ゴーグルの下の口元に笑いが浮かぶ。ピース！

ときどき右側に太平洋が見えたりする。そうかと思うと両側に馬の牧場が続いていたりする。早くも北海道の真っ只中にいるという気にさせるのは、そんな牧場を見たときだった。

けっこの変でも地平線近くまで視界がきく。そして日高地方の空は確かに明るい。

途中、何度もロードマップを確かめながら富川町の交差点に来た。ここを左折して日高に向かう。

次第に山の中へ入って行くという気がしてくる。時々トリップメーターを見ると、時間の短い割に走行距離が多いのにビックリする。早くも平均時速五十キロだ。

日高国道R237を北上しているうちに、少しずつ青空が見えてきた。あるコーナーを回った途端、とつぜん日の光の中へ出た。嬉しかった。

国道の舗装工事中とかで、広い舗装路が突然にダートの砂利道になるのが三ヶ所くらいあった。こんなところをGSXに重い荷物を積んで走るのはちょっと苦労だ。しかし、そこはオフロードの経験がものを言った。

日高龍門の景色はなかなかだ。いま考えると、ここで写真を撮らなかつたことを後悔している。ここのドライブインの駐車場で道沿いにバイクを止めていた二人のライダーが手を振ってくれる。ピース！

ストレートとワインディングを適当に組み合わせながら、次第に山を登りつめていく、といった感じの道だった。

日高町近くの小さなドライブインの駐車場に井出氏のソアラを見つけた。そこでおにぎりを食った。完全にいい天気だ。とうとうツーリング日和になった。

そこを出てすぐにまた国道がダートになった。ロードマップにもはつきりと「未舗装」と記されているところだ。

ストレートは例のスタンディングフォームでこなせるが、フロントフォークがフルボトムする。こうしてみるとオフロードマシンのサスペンションは、よくできているもんだということがわかる。

ときどき、という以上にダンプがすれ違う。一瞬、砂煙で前が何も見えなくなる。たまらない。

峠を越えてダートがアスファルトに変わるまでの道が随分と長く感じた。国道が突然に林道のようなダートに変わる。これが北海道だ。

日高町を通る。北海道の××町というのは、どこも皆同じ景色に見える。山や森や草原の中に突然小さな町が出現しては消える、そういう感じだった。

旭川まであと五十数キロという富良野町の辺りで道端にGSXを止める。続いてソアラも停止。例のドライブインを出てから初めての休憩。十勝岳をバックに写真を撮る。大西氏の家に電話をするが誰も出ない。が、ともかくも時間が充分にあり余っているので、旭川空港にでも行ってみようかということになった。

この辺りから少し天気がおかしくなる。

何も無い平原の真中に突然に空港が出現したという風景。それが旭川空港の印象。

TDAの到着まで時間があるので、空港ターミナルビルのそば屋で納豆そばを食う。そば屋をはじめとして、この空港で働いている女の子はみな色が白い。東京や横浜あたりの色の白い女の子とは、また別の白さだ。雪のように白いというのはこのことをいうのか。この白い肌はとても魅力的だと思った。

到着したTDA機には大西氏は乗っていなかった。三時過ぎにもう一機あるのだが、待つつもりはなくそのまま旭川市街に入った。

旭川ワシントンホテルで早瀬君からの伝言をもらった。一日早く同じホテルに泊まったのだ。こんな遠い旅先で友人からの伝言がもらえるのは嬉しい。しかも同じように北海道をバイクで走っている友人とあつては尚更のことだ。

しばらくホテルの部屋でくつろいだ。家に電話をした。それから井出氏と一緒に旭川の街を散歩しようということになった。いちおう都会とは言え、雰囲気はどこか田舎臭い。原因の一つは街中に流れている有線放送のばかでかい音だ。

買物公園を端から端まで歩き、トウモロコシを食って駅前を少し歩いて、再びホテルに戻った。はつきり言って寒かった。天気の良いもあるのだろうが、真夏とはとても思えない寒さだ。

ホテルに戻って間もなく、ロビーから電話が来た。大西氏の声だった。さっそく井出氏を電話で呼んで下へ下りた。買物公園を少し横に入ったところにある「ユーカー」という店へ連れていかれた。

いかにも北海道らしい木の内装の店だった。腹が減っていたこともあって、寒いわりにはビールが美味かった。ホッケと蟹の甲羅揚げとイカソーメンとホタテとツブ貝を食った。職場の仲間でも旅先で飲む酒は格別だと思った。

ホテルへ戻ってから井出氏の部屋で少し飲んだ。井出氏がサントリローヤルを持って来たからだ。飲みながら三人で明日の計画を立てた。当初の俺のコースに従って旭川から稚内まで走り、時間に余裕があったらその日のうちに宗谷岬まで行ってしまおうということになった。

大西氏は宿泊先である友人の家に帰って行った。